

名古屋城秋の特別公開

アートサイト名古屋城

あるくみるきくを

2024

ART SITE in NAGOYA CASTLE

Found Perspectives for Tasty Sightseeing

を

あじわう

アートに出会う
名古屋城へ

2023年に開催し好評を博した、史跡が舞台のアートプロジェクト「アートサイト名古屋城」。今秋は、年間200万人以上の人々が国内外から訪れる“観光地としての名古屋城”からインスピレーションを受け、「観光する行為」そのものをテーマに、総勢6組のアーティストによる作品を城内全域にわたって展開します。

また会期中には、夕暮れから夜間にかけて賑わう3日間の限定イベント「ナイトミュージアム名古屋城」を開催。観光地であり、文化財でもある名古屋城を味わい、新たな魅力に遭遇する体験をどうぞお楽しみください。

ARTIST PROFILE

狩野哲郎 | Kano Tetsuro

二之丸庭園・本丸御殿内・本丸・御深井丸

1980年宮城県生まれ、神奈川県在住。生物から見た世界／狩猟／漁業／測量などを軸として国内外でリサーチ／滞在制作を行う。近年のインスタレーションでは、時に鳥という「他者の視点」をとりこみ、私たちが意識することのない新たな知覚や複数の世界への想像を促すような作品を制作している。

久保寛子 | Kubo Hiroko

本丸御殿中庭・車寄

1987年広島県生まれ、千葉県在住。広島市立大学芸術学部彫刻専攻を卒業後、テキサスクリスチャン大学美術修士課程修了。先史芸術や民族芸術、文化人類の学説に取材しながら、生活に身近な素材を用いてスケール感の大きなインスタレーションを展開している。

高力猿猴庵 | Kouriki Enkouan

西之丸

1756年生まれ、1831年没の尾張藩士。江戸時代後期の名古屋の祭り、見世物、間帳など、娯楽や話題になった事件の記録をビジュアル入りで記した本を残した。城下の賑わいが生き生きと描写されている。これらは名古屋博物館から「猿猴庵シリーズ」として刊行されている。

菅原果歩 | Sugawara Kaho

乃木倉庫

2000年秋田県生まれ。東京藝術大学先端芸術表現専攻在籍。野鳥を対象に撮影、制作、フィールドワークを行い、主にオルタナティブプロセスを用いて写真をプリントしている。デジタル写真をあえて古典技法を用いて焼き付けることで視覚を物質化し、原初的なイメージを得ようと試みる。

千種創一 | Chigusa Soichi

二之丸庭園

1988年愛知県生まれ。2005年頃より作歌を開始し、歌人、詩人として活動。平易な言葉を使いつつも、感情の機微に新しい陰影を与える歌を得意とする。積極的な会話体の導入による短歌の可能性の拡大を追求している。

ON READING

二之丸庭園

黒田義隆・杏子が運営するbookshop & gallery。2006年に前身となる書店をオープン。2011年に名古屋市東山公園に移転しギャラリーを併設する書店としてリニューアル。2009年に出版レーベル「ELVIS PRESS」を立ち上げ、これまでにおよそ30タイトルをリリースしている。

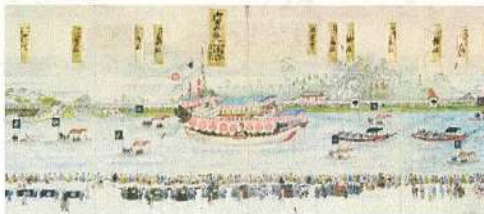
糞虫山人 | Minomushi Sanjin

西之丸

1836年英領国(岐阜県)生まれ、1900年愛知県没の絵師、考古、造園家。生活用具一式を笥(修験者が経文や仏具を入れて背負った木箱)に入れ、全国各地を旅しながら寄留先の様子などを詳細に記録した放浪の面人として知られる。



A



B



C



D



E



あるくみるきくをあじわう

Found Perspectives for Tasty Sightseeing

民俗学者の宮本常一は「歩く」「見る」「聞く」の旅の基本とし、日本観光文化研究所を設立し、雑誌「あるくみるきく」を刊行しました。観光地としてよく知られる史跡名古屋城を会場とする本展は、宮本による「あるく」「みる」「きく」という態度に着想を得ています。

旅と暮らし、記録と表現の民俗誌

本プロジェクトでは、庶民が自由に旅をすることが簡単ではなかった江戸から明治初期にかけて日本国内を旅し、様々な土地の人やものとの出会い交流を重ね、ユーモラスな旅の記録を絵日記で残した美濃国に生まれ尾張国に没した糞虫山人の

絵日記を起点に展開します。糞虫は、アートプロジェクトを先駆けるように旅と表現を結びつけた「あるくみるきく」を刊行しました。観光地としてよく知られる史跡名古屋城を会場とする本展は、宮本による「あるく」「みる」「きく」という態度に着想を得ています。風光明媚な風景や建築物のなかに彼自身や彼が出会った人やものを描き込み、現代のSNSや自撮りを取り入れるような、パーソナルな記憶と土地にまつわる歴史的な記録を重ねた図絵を多数残しました。糞虫山人は「あるくみるきく」を基本とし、それをあじわい愉しむことで独自の旅の表現を築いたのです。

生體、環境、歴史、風景や人への多角的アプローチ

2000年生まれの菅原果歩は名古屋城に棲まうカラスに着目します。昼間は観光客で賑わう名古屋城ですが、夜はたくさんのカラスが舞い戻ります。菅原はカラスたちの様子をサイアノタイプという日光を用いた写真とフィールドノートにより記録していきます。植物や鳥など、人間以外のものたちへ目を向ける狩野哲郎は、屋外の水飲み場やバナナ(芭蕉)

の木など通常の観光ではあまり注目されない場所に立体作品を展開します。さらに本丸御殿でも襖絵の動植物たちに呼応するように作品を展示します。

本丸御殿中庭には、シャチホコに関心を抱いた久保寛子がシャチホコのルーツとされるインドの神歌マカラとそれに跨る女神をモチーフにした彫刻を設置します。マカラは水を司る神で、水害に悩まされてきたこの地域では様々な治水工事が行われてきました。水害や工事現場で用いられるブルーシートを素材に彫刻は形成されます。

そして、二之丸庭園には歌人／詩人の千種創一と短歌集の出版などを行う書店 ON READING の協働による作品を発表します。回遊式庭園の特性を活かし、庭園内各所に千種による短歌が鏡に印字されて散りばめられます。散策のなかで、「わたし」とは何なのか、「あなた」とは何なのかと問いかけようような作品との出会いをお楽しみください。

城内に展開される作品を巡るとともに、文化財、そして観光地としての名古屋城という場も「あるくみるきく」を通じて深く味わっていただければと思います。

服部浩之
(本プロジェクトキュレーター)



糞虫山人(糞虫)明治時代中期頃 | 「糞虫山人絵日記(改訂版)」より

A. 久保寛子《鯉骨のゴッダス》2024 | B. 高力猿猴庵《御船御行列之間》江戸時代後期 | 名古屋博物館所蔵 | C. 糞虫山人《松風あまの味あり一時雨(名産松風長崎廻道)》明治時代中期頃 | 「糞虫山人絵日記」より | 写真:田村雄一 | D. 菅原果歩《飛鳥渡在記》2021-2022 | E. 狩野哲郎《21の特別な要求/21 specific requirements》2021 | Reborn-Art Festival 2021-22-利用と流動性一での展示風景 | F. 千種創一 | 制作:増本綾(2019, PAPERWORK 紙本作業) | チキスト引用元:千種創一《砂丘後》 | 写真:たけのこ | *いずれも参考作品